

2017年1～2月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
ほしきものなど無けれども宝船
大地に日あふれ建国記念の日
二の替声の華やぐ大向う
日に透ける蕊の先まで梅日和
言葉にはならぬ思ひも寒見舞

藤沢 藤田 富子
散るもみぢ鮮やかなるを葉にと
住む人の無き庭落葉散り敷けり
冬霞スカイツリーをつつみをり
足繁く通ふ小春の小買物
酔客の背なおでん屋ののれん越し

町田 小森 まさひこ
山肌の雲影もしや雪女
展望の下に凍てつく湖と森
オリオンに月重なればさらに凍し
梅の木に流れに春の兆しあり
なごり雪二十二歳の時をふと

2017年3～4月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
食べたくもあり食べたくもなき田螺
ひとつ去り春の愁のまたひとつ
惜しみつつなほ大胆に剪定す
泡を吹く穴への期待汐干狩
パラボラに宇宙の風の光るかな

藤沢 藤田 富子
落の臺土手に花芽をのぞかせて
二月礼者の曾孫生まれをよろこびぬ
まんさくの光古刹の道を占む
三寒に気のゆるされぬ昨日今日
鶯の笛冬の波間に低くあり

八王子 石井 蓉子
水仙が春すぐそこと告げており
青空に白梅紅梅咲初むる
夕暮れやなんと日脚の伸びたこと
一人居に雛菓子切なくも甘し
ランドセルの真新しきが通り過ぐ

町田 小森 まさひこ
荒天に集ひし忌日のあたたかし
放置さる広き空き地に鳴くびばり
種蒔くや点となりたるトラクター
横山の色に移ろひ春闌ける
老鶯の鳴き継ぐ道をたどりゆく

2017年5～6月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
ひとひらの揺れてひとひら散るポピー
まっすぐに泳ぎにくさうなる金魚
けだるき香立て山梔子の花の錆
絞り出す氣力を焼きつくす暑さ
ビル群は首都の幻想夏霞

藤沢 藤田 富子
行楽の戻り渋滞花曇り
古民家の藁屋根ゆらり陽炎へる
沈丁の香りほのかにひろごれる
初花の下に寄り添ふ道祖神
のどけしや嬰兒は母に知恵増せり

八王子 石井 蓉子
春の雨静かな静かな日曜日
三年の日々を思へば桜咲く
一人居の家事進みゆく春の朝
さえずりの部屋に飛び込む朝かな
山なみを近くに見せて光る風

町田 小森 まさひこ
翡翠の色を残して飛びゆけり
改めて思ふ憲法記念の日
メーデーや年俸契約すませけり
卯波打つ太平洋を刺す岬に
俳聖の乗船の地の出水かな

2017年7～8月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
避暑暮し鳥も獣もみな仲間
一枚の日除けに狭くする世間
漂へる心に揺るる星月夜
連発の間に厚みを生む花火
胸に住む人の声聞く星月夜

藤沢 藤田 富子
友逝きて更地に残る濃紫陽花
苔むせる一番札所著我の花
春暁の夢に語れる夫のゐて
軽鳧の子のお尻ふりふり笑み誘ふ
(軽鳧／かる:かるがも)
鮮やかに光を放つ苔の花

八王子 石井 蓉子
一人占めせし公園の緑かな
夏の夕公園に子のいつまでも
一人居や夜更したき夏至の夜
日の匂ひ取り込む夏の屋下がり
悲しみは捨て去るものや薔薇真っ赤

町田 小森 まさひこ
蝦夷菊の蝦夷の短き夏を咲く
夏至といふ日の追われたる蝦夷の農
月見草萎みし時の帰宅かな
国境の海の上なる星月夜
峠道これより下り天の川

2017年9～10月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
颯風に玻璃一枚を隔つのみ
不器用に日々をこなして爽やかに
月光やこの世のことはなべて些事
偶然といふ爽やかな出会ひかな
すぐそこにありて遥けき虫の闇

藤沢 藤田 富子
怠けぐせ暑さのせいにしておりぬ
何をする気にもなれずに夕端居
稲妻の玻璃光らせてくる恐怖
払暁の夢か現か汗しどど
年を経し今も記憶の敗戦忌

八王子 石井 蓉子
朝刊に処暑と書かれていて猛暑
蛸のひと日一日に違いあり
暑き日や今日は長崎原爆忌
通勤の歩幅に合わせ蝉の声
さあ仕事入道雲がわらってる

町田 小森 まさひこ
天高しシフブレ俳句七十回
一村が秋の実りに沈みたる
新米ののぼりに足が向かひたる
高原の早し日暮れに松虫草
数珠玉や下校児童は固まりて

2017年11～12月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
どこまでも飛びたき一枚の木の葉
きつつきの森を明るくする響き
窮屈な毬よりころげ出でし栗
大綿のかくれ上手といふ浮遊
ぬかずきて聞く深秋の山の音

藤沢 藤田 富子
チツチと鳴き慌しきや石たたき
名月やむら雲に見えかくれして
案山子にも流行りすたりのあるやうな
彩を残す病葉持ち帰る
秋天の広さをうづめつくす雲

町田 小森 まさひこ
柳散る石橋一つまた一つ
長雨の続く一日の小春かな
ざくざくと残りの菊の刈られたる
神迎手入れされたる古社
初雪や眠る用意の大平原

松尾芭蕉
きりぎりす忘れ音に啼く火燧哉
あら何ともなや昨日は過ぎて河豚汁
霰せば網代の氷魚を煮て出さん
乾鮭も空也の瘦も寒の中
生きながら一つに氷る海鼠かな